実業高校や専門・専修学校は高等専門学校を目指そう

―東京都産業教育振興会で考える―

開倫塾
塾長 林　明夫

Q：実業高校や専門・専修学校の校長先生方に講演をしたそうですね。

A：(林明夫。以下略)はい。6 月 26 日(金)の午後 3 時から 1 時間半あまり、東京の新宿にある全商会館(全国商業高等学校協会)で開催された東京都産業教育振興会平成 27 年度総会後の講演会で、「これからの産業教育に期待する企業や社会が求める能力とは何か」というテーマでお話をさせて頂きました。東京都教育委員会産業教育担当責任者、工業高校、商業高校、農芸高校、専門学校、専修学校、高等専門学校の校長先生はじめ経済団体の方々、50 名の皆様にお話をすることができました。

Q：企業や社会が産業教育に求めることは何だとお考えですか。

A：(1)自覚をもって学ぶこと、主体的に学ぶ力を身に着けること。
(2)今まで行ってきたこと、今行っていること、これから行おうとすることの「価値」や「意味」を自分の力で考えること。
(3)その上で、やるべきこと、やらないほうがよいことを自分の力で考え、自律的に行動すること。
(4)課題を発見し、課題を解決する力を身に着けること。
(5)自分自身で新しいチームを立ち上げ、新しいことに挑戦すること。

Q：なぜこのような能力が求められるのですか。

A：(1)現代は、知識基盤社会、グローバル社会であると同時に、課題が山のようにある課題山積社会です。企業や社会で求められるのは、顧客や社会の問題を自らの手で発見し、自らの手で解決する力です。
(2)そのためには、自らの企業や、そこで働く自分自身の「社会的使命を自覚」して、「主体的に学ぶ力」が必要です。自分たちで新しいチームを立ち上げ、企業や社会のイノベーションの担い手になる力が求められます。
(3)1 つ 1 つの仕事や社会的活動には、なぜそのようなことをするのか、また、しないのか、「価値」や「意味」があります。1 つ 1 つの仕事や活動の「価値」を十分に理解、認識し、自分の行動を「意味付け」することが大切です。

Q：産業教育に対して提言することはありますか。

A：あります。山のようにあります。
(1)その第 1 は、工業高校、商業高校、農芸高校などの実業高校や専門学校、専修学校は 5 年制の高等専門学校を目指して頂きたいということです。
(2)2019 年度より大学の入試制度が大幅に改革されようとしています。高等専門学校も工業だ

けではなく、多くの産業に開かれようとしていますので、時代の要請に合致した高等専門学校の設立を、産業教育を担っている学校は公立、私立を問わず目指して頂きたく思うからです。

（3）志の高い「工業高校は工業高等専門学校」に、「商業高校は商業高等専門学校」に、「農芸高校は農芸高等専門学校」に、「医療・福祉専門学校は医療・福祉高等専門学校」に、「コンピューター専門学校はコンピューター高等専門学校」にと、組織改革を行うことを提言いたします。

（4）なぜなら、時代は変わって、実業高校の卒業生の大半は直接就職せず、大学、短期大学、専門学校、専修学校に進学するからです。また、専門学校や専修学校の入学者の半数以上は、大学や短期大学の卒業者だからです。

（5）実業高校の卒業者の大半が進学するのなら、高等専門学校として 5 年間一貫教育をすべきと考えます。多くの方々が大学や短期大学などを卒業してから専門学校などに入学するのなら、初めから高等専門学校で学んだほうがいいのではないかと考えるからです。

Q：実業高校や専門学校を高等専門学校に改編するときの課題は何ですか。

A：（1）生徒数が減少している実業高校や専門学校が多いので、建物や設備は図書館の整備くらいで十分と考えます。建物は空いている教室を活用するなどして、費用をかけずにできると考えます。

（2）最大の課題は、先生の資質向上です。国立高等専門学校の先生方の大半は大学院博士課程や修士課程を修了なさっておられるようです。高等専門学校を目指す場合には、そこで教える先生は大学院に進学して修士課程や博士課程で学んで頂くことを提言いたします。

Q：エーッ、大学院ですか。それは大変そうですね。

A：（1）フィンランドはじめ先進諸国の多くでは、小学校、中学校、高校の先生の大半は大学院修士課程の修了者です。学校長はじめ学校の管理職の多くは大学院博士課程の修了者です。

（2）どこの国でも、先生の資質向上として、新たに採用する先生は大学院修士課程の修了者しか採用しません。現職の先生方の多くは大学院で学び直しています。

（3）フィンランドのように、大学院修士課程修了者でなければ小学校、中学校、高校の先生にはなれない国もあります。

Q：この他に、産業教育に提言したいことはありますか。

A：（1）英語とパソコンだけは学校の教科書に書いてある内容を一語残らず正確に理解させ、完全に身に着けてから卒業させて頂きたい。

（2）これからの企業や社会では、どのような仕事や社会的活動をするときにも英語とパソコンが身に着いていなければ話になりません。

（3）挨拶や単語をならべるだけの英語では、十分なコミュニケーションができません。

（4）英語とパソコンの基礎、ワード初級、エクセル初級は学校時代に確実に身に着けるべきです。

（5）たとえ卒業式が終わっても、3 月 31 日までは当校の生徒です。学校で使った英語の教科書がスラスラと口をついて出てくるまで、また、正確に書けるようになるまで、「音読練習」と「書き取り練習」をさせてから送り出して頂きたい。3 月 31 日まで、学校で使ったパソコンのテキストのすべてを完全に身に着けさせて頂きたい。

Q：学習塾、予備校、私立学校の経営者の皆様にお伝えすることはありますか。

A：（1）2019 年度より、英語の読む、聞く、話す、書くの 4 技能を同一配点で評価するよう英語の

大学入試が大幅に改革されます。高校入試にも同様の改革があると推測されますので、これにどう対処するかお悩みの先生方が多いと思います。

（2）私の考えはただ一つ。「音読」と「書き取り」の徹底指導です。一度学習したテキスト、一度挑戦した模擬試験や入試の過去問を、スミからスミまで口をついて出てくるようになるまで「音読練習」を繰り返す。正確に書けるようになるまで「書き取り練習」を繰り返す。授業でもこれを指導することです。

（3）中国の高校生や大学生はなぜ英語をスラスラと話すのか、立派な英語を書くのか。答えは簡単です。中国でも高校や大学の学年が上がれば上がるほど英語も難しい内容を学習しますが、高校生や大学生は習った英語を大きな声で読む練習と正確に書く練習を怠ることがありません。

（4）意味だけわかっても、読む練習をしてスラスラと口をついて出てくるまでにしないと、英語は身に着かないことを知っているからです。正確に書く練習をしないと、英語は書けるようにならないことを知っているからです。

（5）何年習っても英語が身に着かない日本の中学校高学年生や高校生は、「音読練習」と「書き取り練習」をしなすぎ、怠りすぎです。「音読練習」と「書き取り練習」の不足、それが最大の理由と私は考えます。

（6）とりあえず、我々が今できる英語 4 技能同一評価対策は、教えた内容のすべてをスラスラとよく読めるようになるまで「音読練習」と、正確に書けるようになるまで「書き取り練習」を奨励、生徒全員がこの練習ができるようになるまで授業中に先生の目の前で行わせることだと考えます。

（7）開倫塾では今後、全校舎で小学校 1 年生から高校 3 年生まで例外なく英語の「音読練習」と「書き取り練習」を授業中に徹底させようと考えています。

Q：最後に一言どうぞ。

A：今月のお勧めの１冊は、「ケインとアベル」で有名なイギリスのベストセラー小説家ジェフリー・アーチャーの最新作「追風(おいて)に帆を上げよ」（上・下）新潮文庫、新潮社 2015 年 4 月 1 日刊です。この作品は、アーチャーの新シリーズである「クリフトンシリーズ」の第 4 作目です。「クリフトンシリーズ」の第 1 作「時のみぞ知る」、第 2 作「死もまた我等なり」、第 3 作「裁きの鐘は」とともに、夏休みの読書として是非お楽しみください。

― 2015 年 6 月 30 日林明夫記―